

Sodick

株式会社 ソディック

グローバル戦略を加速するため基幹システムをSAPに統合 周辺システムとの柔軟な連携で現場業務の利便性も確保

必要なシステムは内製で構築し、コストと開発期間を大幅に圧縮

金属の切断などに使う放電加工機や食品加工機、モーター・制御装置などを製造し、ものづくりの現場を支える株式会社 ソディック。同社は、これまで国や地域ごとに構築・運用してきた15の基幹システムをSAPに統合。その際、アプリケーション自動生成ツールおよびASTERIA Warpの導入によって、必要なサブシステムを内製し、SAPと連携できる仕組みを整えた。これにより、現場業務の利便性と、グローバルの経営高度化の双方を満たす業務システムを実現している。

基幹システムのリプレースに際し 現場業務との整合を図る必要が発生

放電加工機で世界シェアの約30%※を占め、アジア、欧州、北米などに広く拠点を展開する製造機器メーカー、ソディック。同社は、グローバルにおける全社のガバナンス強化を目的に、2011年より基幹システムの統合・リプレースを実施した。「国や地域ごとに15も存在した従来の基幹システムを統合し、全社の売上や財務データの見える化、および部品在庫状況のリアルタイムな把握などを実現することが目的です」と同社の斎藤 幸典氏は説明する。

同社は、グローバル統一の基幹システムにSAPを採用し、香港、上海の拠点を皮切りに、まずは全社のバックエンド業務を担う会計システムを統合。続いて生産管理、在庫管理といった工場が扱うシステムも順次統合を進めていった。

しかし、そこで会社はある課題に突き当たった。それが、SAPシステムの機能と、日本国内の工場の実業務との整合性である。

SAPシステムの利用に当たっては、ベストプラクティスにより標準化された業務フローに現場業務をあわせることが必要になる。だが、こと生産管理や在庫管理といった工場が扱う業務においては、商流別の価格設定といった日本固有の商習慣が多数存在。全業務をSAPシステムの標準機能だけで賄うのが難しい状況だったのだ。

「SAPの機能を拡張して実業務にフィットさせる方法はありませんでしたが、その場合は専門のベンダーへの開発委託が必要となり、多大なコストがかかります。しかも、国内のシステム

リプレースに与えられた期間はわずか3カ月。つまり、システム刷新後も、現場業務の利便性を損なわないための仕組みを、最適なコストと期間で用意することが喫緊の課題として浮上したのです」と斎藤氏は言う。

必要なサブシステムを内製し SAPと柔軟に連携できる仕組みを構築

そこで同社は、既存の業務に対応したサブシステムを新たに内製する方法を検討。SAPがカバーしきれない業務については、自社構築のシステムを用意することで、滞りなく行える環境を実現することにした。

具体的な方法は次のようなものだ。まず、サブシステムは複数拠点で使えるよう、Webベースで構築。均質なシステムを迅速に開発する手段として、アプリケーション自動生成ツールを活用する。また、生成したアプリケーションはEAIツールを介してSAPと連携。疎結合の状態にすることで、将来的に業務フローの変更などが発生しても、基幹システムには手を加えずに対応できる状態にする。「システムの追加や変更にも、内製で即応できる状態を目指しました」と同社の江守 邦宏氏は話す。

こうした方針の下で採用したのが、キャンノンソフトウェアのシステム自動生成ツール「Web Performer」、そしてアステリアのEAIツール「ASTERIA Warp」である。

「Web Performerは扱いの簡単さを評価。しかし、単体でシステム間連携までを行おうとする場合はプログラミングが必要なため、その分、工数が増えます。その点、連携部分にASTERIA Warpを活用すれば、『フローデザイナー』上でアイコンをドラッグ&ドロップするだけ。ノンプログラミングで簡単にシステム



株式会社 ソディック
執行役員
総合企画本部 副本部長
情報システム部 部長
斎藤 幸典氏
さいとう ゆきのり



株式会社 ソディック
情報システム部
江守 邦宏氏
えもり くにおろ



株式会社 ソディック
総合企画本部
情報システム部
大田 俊治氏
おたい しゅんじ



●CORPORATE DATA

株式会社 ソディック

1976年8月、神奈川県横浜市にて設立。顧客のためには「創造 (So)」「実行 (di)」「苦勞・克服 (ck)」を厭わない精神が社名の由来。放電加工機を中心とする工作機械のほか、射出成形機や食品加工機械などを手がける。従業員2,999名 (2014年3月末・連結)、売上高568億円 (2014年3月期・連結)。

本社所在地 ●神奈川県横浜市都筑区仲町台3-12-1
URL ●<http://www.sodick.co.jp/>

連携を実現できる点が大きなメリットでした」と江守氏は採用理由を述べる。

また同社は、ASTERIA Warpの選定に当たり、実際の業務に近いデータ連携のデモを確認。「Web Performer側で入力した見積もりをSAPシステムに反映し、その後承認を進めるといった一連の処理がスムーズに実現できました。これなら、実業務でも問題なく使えると感じました」と斎藤氏は話す。

**条件付きレイヤーなど、高度な
ASTERIA Warpの機能も活用**

同社は、基幹システム入れ替えと並行して、Web PerformerおよびASTERIA Warpによるサブシステムの開発・連携を実施した。現在は、保守サービスの受付、部品手配などを行う「サービスWebシステム」と、伝票管理・製造管理などを担う「S-MES (Sodick MES : Manufacturing Execution System)」をWebアプリケーションで用意。同時に、取引先とのEDIを含む受発注管理を別途PHPで内製し、それぞれをASTERIA WarpでSAPシステムと連携している。これにより、SAPシステムによる標準化された業務をベースにしつつ、一部既存の業務フローも変わらず実行できる業務環境を現場に提供している。



「リプレース中の3カ月に、ASTERIA Warpで構築した連携フローは約30本。その後現在までに、内製で構築したフロー数は約60本になっています。ASTERIA Warpは、データの流れが視覚的に把握できるため、設計書を用意せずともフロー作成に取り掛かれます。そのため、今回のような短期間のプロジェクトでもシステム間連携を完遂することができました」と同社の大田 俊治氏は満足感を示す。

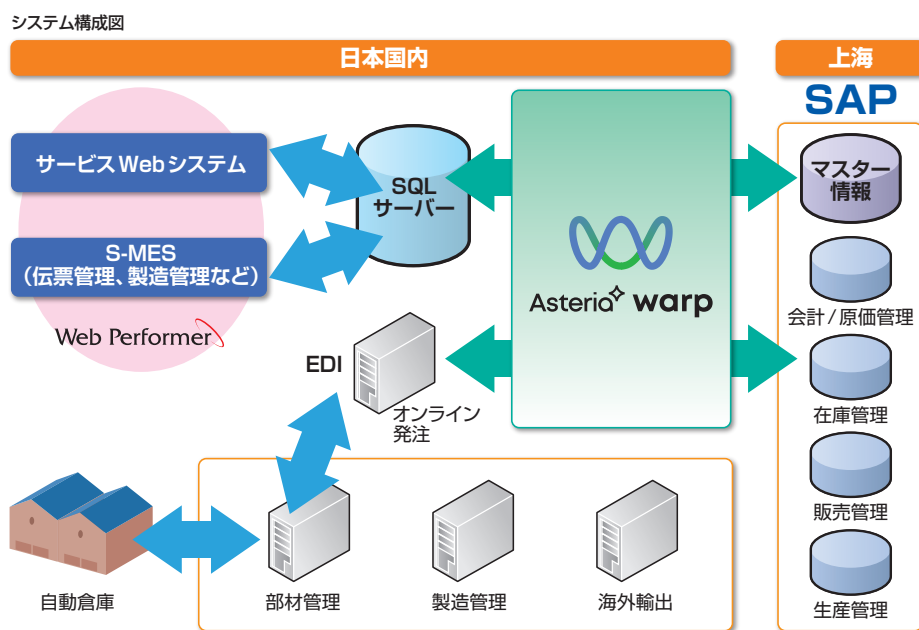
また同社は、アステリアによる導入トレーニングも受講。その内容の分かりやすさも、

開発効率向上に役立ったという。

さらに同社は、ASTERIA Warpの高度な機能も積極的に活用している。たとえば、画面内の要素が多くなりがちな、複雑な連携やデータ変換の作成時には表示を分ける「レイヤー機能」を使用し、フロー構築画面の見やすさにも配慮。ときには特定条件時のみ処理を行う「条件付きレイヤー」も使用している。「SAPから受け取ったデータを固定長データに整えてからWeb Performerに渡すなど、あらかじめASTERIA Warpでデータを加工しておくことで、後段の処理の複雑化を避けつつ役割を分担させることが可能。さらに、視覚的にも分かりやすくなるのが、使ってみて分かりました」と江守氏は話す。従来、こうしたデータを整える処理にはプログラムを組む必要があり、担当者に大きな作業負荷が発生していた。現在はASTERIA Warpでの自動化により、その負荷はほぼなくなったという。

同社は今後、工場で利用される他の業務システムについても、徐々にWeb PerformerとASTERIA Warpによる内製に移行していく計画だ。「各部署の要望にも応えながら、連携先システムは随時拡充していきたい。より規模の大きな連携を構築する際には、ASTERIA Warpをグループ内のシステム開発会社に横展開することも視野に入れていきます」と斎藤氏。ASTERIA Warpは、同社のグローバル戦略を支えるツールとして、一層その重要性を増していくことだろう。

※ソディック調べ



Asteria
アステリア株式会社
<https://www.asteria.com/>

〒140-0014 東京都品川区大井1丁目47番1号 NTビル1F
TEL. 03-5718-1250

このカタログに記載された情報は2014年9月現在のものです。内容は予告なしに変更することがあります。Asteriaはアステリア株式会社の登録商標です。その他、各会社名、各製品名は、各社の商標または登録商標です。

©2020 Asteria Corporation

お問い合わせ先：